

## 鑽孔テープ気送管の話

「私が気送管を使用した外信課に勤務した時代(1955年頃～1961年)の記憶による」

2024.3.11

樫村慶一

KDDが設立され、大手町に新局舎が建設されたのは、通信方式がモールス通信からテレプリンター通信に転換する時代であり、通信室の近代設備として、気送管システムが設置された。鑽孔テープ気送管は、透明なビニールパイプを使用し、各種通信席とコントロール席間を飛走し、その結果、再鑽孔作業を省略することができるようになった。

気送管ネットワーク（外信課の場合を例に挙げる）は、それぞれの対外国回線から受信した5単位テープを、宛先によって設置されているコントロール席宛てに送る（註）。パイプの入口には蓋はなく、常時吸い込む状態になっていた。宛先を見て（たとえば国内の他の都市宛てか、自局（大手町の場合都内）宛てか、更に外国回線へ回す中継信かによって）、それぞれの行先のパイプに吸い込ませる。パイプには蓋はなく、中は常に空気が吸い込む状態になっていた。上下のパイプを走るテープは”く”の字になって走るので問題は起きないおが、水平に走るパイプの中では、テープが伸び、パイプに静電気が発生して、しばしばテープがパイプの中に張り付き、遅延の原因になった。それを監視し、張り付いているテープを発見すると、パイプを棒で下から叩いて飛ばすのが、管理者の仕事でもあった。

外信課のコントロール席には、各通信席から受信し外国へ送信するテープがどんどん流れて来る、それを受ける大きなビニールの容器があり、そこへ溜まる。それを取り出して、対外送信席へ人手で運び、席の後側のテープ掛けに、通信席に頭が少しでるように掛ける。オペレーターは、テープ掛けに頭だけ出しているテープを引っ張り出し、送信機にかける。

この気送管方式も、先の静電気の問題とか他にも欠点があったようで、大阪新局舎では、気送管システムは採用されず、大阪プッシュボタン(OPBシステム)方式が採用された。

凡そ70年近い年月が経ているので、間違いがあるかもしれないが、覚えている人、間違いを指摘できる人も、もうあまりいないだろう。この時代は、プロ野球では、三原監督の西鉄ライオンズが鉄腕稲尾の3連投で巨人を下し、日本シリーズ3連覇を果たしたり、長嶋が巨人に入り、プロ活動の初日、国鉄の金田に4打席4三振を食らったなどが話題になった時代で、私もまだ25～30歳でした。

（註）外信課のコントロール席（略称トラコン：トラフィック・コントロール席）。

外信課のほぼ中央に位置し、個別の対外国回線からは、以遠外国宛ての中継信が集まる（個別の通信席からのパイプは途中で集約されていたのだと思うが、どうなっていたのか覚えていない）。1階の受付から発信されたものは受付課で鑽孔され、それが鑽孔席横の気送管から送られてくる。国内の他の局や、NTTの局から発信された電報は内信課で受信され、そこからのテープが集まる。こうして、外信課のコントロール席には対外国宛ての発信電報、中継電報のテープが集中する。各対外回線から受信したものの中の、国内宛て、東京都内あては、通信席担当者が、その場で判別して、それぞれ宛てのパイプに流す。本当に再鑽孔を省略しただけのものだった。

## 気送管イメージ



### ① 外信対外通信席の送信テープ。

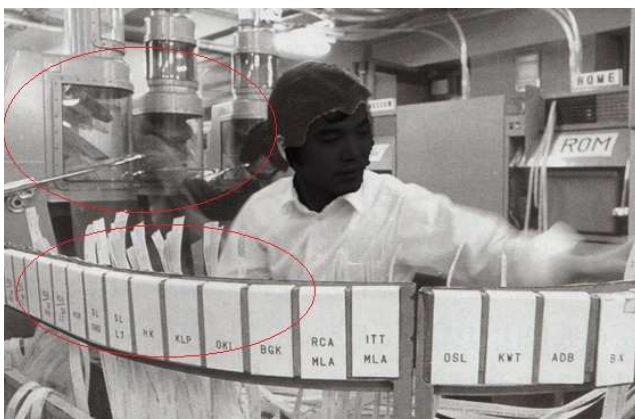
外信トラコン席から運び担当が、通信席まで運び、通信席の後ろ側から、送信電報テープの頭だけ前に出して掛けて置く、オペレーターは前から引き抜き送信機に掛ける、



### ② 何処の通信席が不明だが、赤丸の部分が、着信したテープを次の段階へ送る気送管の投入口。



③ 国内のテープ作成席だともう。原書を見て鑽孔してテープを作り。各席にある外信課あて気送管投入口から投入する。赤丸の中にある水平部分のチューブ内に、しばしばテープが張り付く。

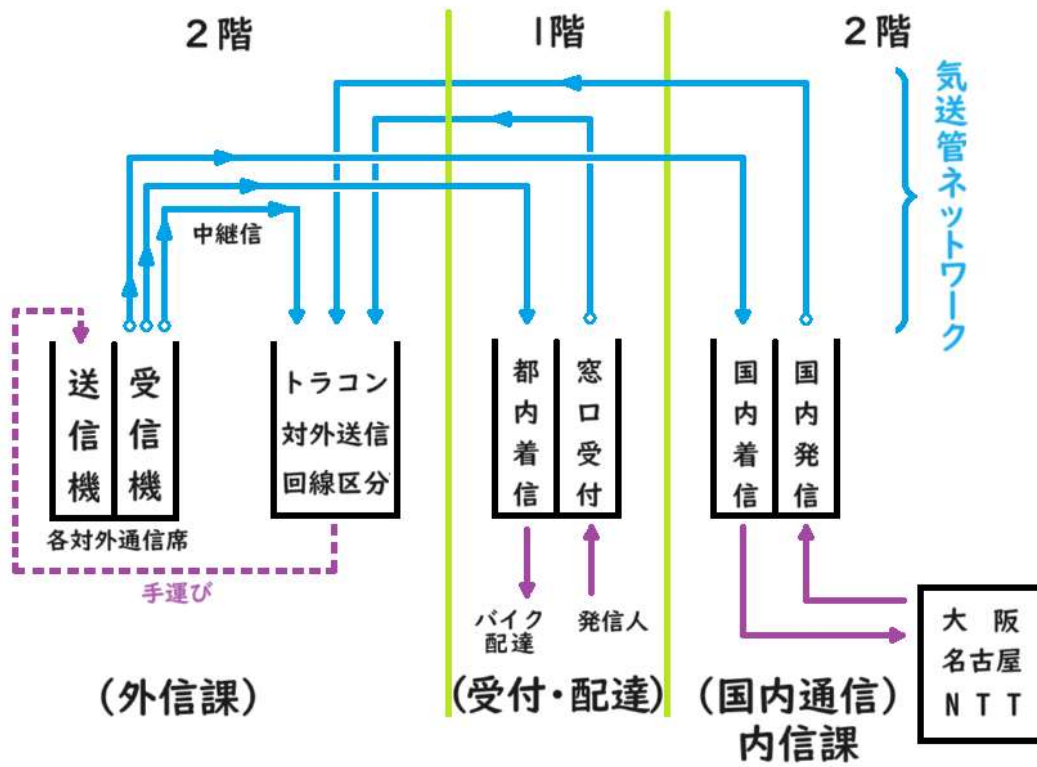


### ④ 外信課のトラフィック・コントロール席。

左上の赤丸の中に、各所からの発信電報テープが落下してくる。それを宛先により、当該送信回線別にな下の赤丸の中に在る各対外回線別のテープ掛けにかける。これを配信係が各回線席に手運びで運ぶ。

①の写真参照。

# 大手町新局舎 (1955年頃)



※ 各箱は端末と思っても差し支えないが、1955年代～には端末などという言葉はなかった。かなり記憶が薄いので間違いは容赦願いたい。